

随想 徳島で文化資源を発掘する

徳島経済研究所技術顧問 工学博士

西池氏裕

第1章 阿波の文化風土を形成していく資源

1-1 文化資源を発掘して磨く

阿波の風土には多様な文化的「資源」が眠っている。それを見つけて加工する必要がある。無論今までも多くの文化的資源に対してその努力が営々と成されてきたし、今も続いている。「阿波踊り」「人形浄瑠璃」「藍染め」などはある意味では発掘済みの、メジャーな例であり、徳島経済研究所で出している『徳島が好きになる本』はそれらの徳島の文化資源を興味深く紹介している。

本論では、いまだ発掘過程にあるとか、方向性を変化させる必要があるのではないかと感じる2人の文化人資源についていくつか考察した。随想としたのは、様々な領域とレベルのことを語るためである。

1-2 関寛齋のドラマチックな人生

○関寛齋という人

もし、NHK 大河ドラマの主人公として徳島の人物を一人あげるとすると、私は関寛齋^{せきかんさい}を推す。ドラマチックな人生を送り、興味深いエピソードも多い。寛齋は江戸末期の文政13年2月18日(1830年3月12日)に生まれ、大正元年(1912年)10月15日に没した蘭方医である。徳島市の中徳島河畔緑地に胸像がある。郷土の偉人として名前を知る人は少なくないが、生涯や業績に関してあまり知られていないようだ。少し詳

しく紹介したい。

寛齋は現在の千葉県東金市東中に生まれた。18歳の時、佐藤泰然の佐倉「順天堂」で蘭医学を学ぶ。「順天堂」は大阪の緒方洪庵の「適塾」と並び当時の二大蘭学塾といわれる。その後、有名な津波防災話「稲むらの火」(後記注)のモデルである濱口儀兵衛(梧陵)(1820-1885)に知己を得て、彼の勧めにより長崎養成所で学ぶことになる。長崎養成所はオランダ軍医ポンペの進言により幕府が設立した日本で初めての西洋式近代病院である。寛齋はそこで一年余学び、銚子にもどり開業する。その年(1862年)に徳島の藩医として招かれ、ここに徳島との縁が生じた。

戊辰戦争では官軍の奥羽出張病院頭取となり、日本の赤十字精神の先駆けといわれる博愛主義で両軍の戦傷者の治療に努めた。明治に入り、徳島医学校と付属病院(現在県医師会館がある)を創立、また、山梨病院長などを歴任するが、自己の栄達栄爵を顧みず、野に下った。1873年(明6)には徳島の住吉島で開業、世禄も士族籍も奉還して一町医者となった。不平士族の渦巻く当時の世相で新時代のあるべき姿を信じた行動で実に潔い。町医者になった彼はそこで理想とする医療を行い、貧しい人々には無料で治療を行うなど(無料患者が有料患者の6倍いたそうである)、長年貧民施療に尽力し、患者からは「関大明神」と崇められ、慕われたという。

それだけでも、波乱万丈の人生であるが、さらなる寛齋の凄さは晩年にある。1902年72歳にして、日ごろ計画していた北海道開拓を決意し実行に移す。金婚式にあたり決意したという。寛齋自身が著した「関牧場創業記事」(1910明43)

の端書きには、〈世の中をわたりくらべて今ぞ知る／阿波の鳴門は浪風ぞ無き〉と和歌を記し、次のように書いている。

*** 予は第二の故郷として徳島に住する事殆んど四十年、為に数十回鳴門を渡りたるも、暴風激浪の為に苦しめらるる事を記憶せざるなり。然るに今や八十一歳にして既往を回顧する時は、数十回の天災人害は、思い出すに於ても粟起するを覚うる事あり。然れども今日迄無事に生活し居るは、実に冥々裡に或る保護に頼るを感謝するのみ。(中略)。明治三十四年には、我等夫婦に結婚後五十年たるを以て、児輩の勧めにより金婚式の祝を心ばかりを挙げたり。然るにかかる幸福を得たるのみならず、身体健康、且つ僅少なる養老費の貯えあり。これを保有して空しく楽隠居たる生活し、以て安逸を得て死を待つは、此れ人たるの本分たらざるを悟る事あり。***

徳島はいかに穏やかな地であるかということ、記しているとともに、その穏やかさの中で安逸に人生を終えることに彼は人間として忸怩たる思いがあることを吐露しているのである。

このころの寛齋は二宮尊徳の思想に感化され、またトルストイにも心酔している。北海道の開拓を思い立ったのは四男又一が札幌農学校で学んでいたこともあると思うが、農政を通じて経世済民を目指した尊徳の報徳思想に共鳴するところがあったことが動機であろう。北海道では石狩樽川農場を開拓し、更に奥地である十勝国斗満の地に入植する。開拓農場の方針としては、二宮尊親(後記注)が経営する二宮農場を参考にして積善社を結社した。

北海道の開拓は現在では想像が及ばないくらい苦しい生活であったろう。極寒地であるだけでなく、豊かな自然があるだけの、いわば何も無い土地からの出発である。斗満の地には開拓

の父として記念像がある。

またトルストイの思想に共鳴を示し、理想的農村建設をめざした。トルストイは明治期から大正期にかけて最も日本の文化的潮流・文学者のみならず宗教者、社会主義者などに影響を与えた外国人作家の一人である。大地主で帝政ロシアの貴族の家に生まれたトルストイは農地経営改革、農奴解放などを試み、また小説執筆活動を通じて人生や社会の諸課題とむきあい、その生き方や思想がトルストイズムとして世界中に影響を与えた。日本の文学者も何人もがトルストイを訪ねているが、徳富蘆花もその一人である。私が関寛齋を初めて知ったのは若い頃の愛読書である徳富蘆花の「みみずのたはこと」に寛齋が登場するからだ。【明治四十一年四月二日の昼過ぎ、妙な爺さんが訪ねて来た。北海道の山中に牛馬を飼って居る関と云う爺と名のる。】と描かれている。そこから二人の交友は始まり、明治四十三年九月二十四日に蘆花はついに斗満の寛齋の農場を訪問する。「みみずのたはこと」にはその時の様子が日記の体に書かれていて、興味の尽きることはない。徳島からもその時期多くの人が北海道開拓に渡っているはずだが、そのころの苦しい生活を偲ぶことができる。一週間ほど斗満の寛齋と遊んだ蘆花は東京に帰り、関寛齋に関する既述は次のように終わる。

【翁は十月十五日、八十三歳の生涯を斗満なる其子の家に終えたのである。翁の臨終には、形に於て乃木翁に近く、精神に於てトルストイ翁に近く、而して何れにもない苦しみがあった。然し今は詳に説く可き場合でない】。蘆花は詳細には述べていない。だがそこには寛齋の理想とした独立自営農民と息子又一の目指した資本主義的大農牧経営の軋轢の苦しみがあったのではないかといわれる。寛齋は82歳で服毒、自死する。

繰り返すが、関寛齋の人生は非常にドラマチックである。特に老年からの活躍は今の時代の人に驚異的感動を与えるのではないか。私自

身は以前『関寛齋の道』という随想で書いたが、たまたま移り住む先々、武蔵野にある蘆花公園（蘆花恒春園）の蘆花記念館、千葉東金の胸像、千葉佐倉の順天堂で彼の生きていた証を示す資料に遭遇したという縁がある。しかし、それで興味を覚え、彼の生涯を識るにつれ、人間の一生とは何だろうかという詰問を、彼からつきつけられているような気がするのである。

○関寛齋の顕彰

寛齋の顕彰作業は比較すれば徳島県以外の所縁の土地で進んでいる。

彼のドラマチックな人生は小説家の触手をくすぐるのであろう。すでに引用した徳富蘆花の「みみずのたはこと」には一章を割いて寛齋が登場する。ほかにも司馬遼太郎『胡蝶の夢』『街道をゆく 15 北海道の諸道』や城山三郎『人生余熱あり』に登場する。『胡蝶の夢』は関寛齋や、順天堂の松本良順、島倉伊之助（司馬凌海）、ポンペ等が登場して幕末から明治にかけての世の動きを医学の目を通して眺めた小説である。だが寛齋を主人公とした小説はもっと多く存在していると思う。

彼の伝記・研究書も出版されている。例えば川崎巳三郎氏の『関寛齋』は新書版で読みやすい。また福島義一氏の『阿波医学史』は郷土の近代医学の父としての寛齋の姿がよく分かる。

寛齋の活躍した地域の中で期間が一番長いのは徳島、そして千葉、北海道であろう。ある人の業績を顕彰し文化的資源として活用するには博物館や記念館、資料館の存在が最も効果的である。それらの土地における顕彰の方法はどうであろうか。

北海道陸別町大通には彼を顕彰する「関寛齋資料館」がある。陸別町は関親子が入植し開拓を始めたことによって生まれた村が発達したところである。陸別町のパンフレットを見ると、関寛齋への敬慕の念があふれ出ていることに感銘を受ける。それと同時に、文化観光資源を複合化

し実にうまく活用していることに気がつく。「日本一のしばれの町」として気温の低いことを、銀河の森天文台を作り夜空の美しさを、トナム地区の牧場を自然の景観として、蘆花が寛齋を訪ねていったころ開通した鉄道を「ふるさと銀河線りくべつ鉄道」として、また土地の食べ物は、これらが複合した3D的構造をもった文化観光資源となっており、その集約点としての資料館の存在が光っているのである。「りくべつ道の駅」にある関寛齋像はとても格好がよいが、実物を見損なったのが心残りである。



北海道の関寛齋の像（陸別町関寛齋資料館提供）

千葉の東金市の東金中央公園には寛齋の胸像がある。寛齋が東金出身であり、また佐倉順天堂に学んだ縁によるものだ。千葉の佐倉の順天堂跡には佐藤泰然と弟子の寛齋の資料が市の文化財として残っている。

残念ながら、他の所縁の地域に比較して最も人生を多く過ごした徳島における寛齋の顕彰は進んでいるとはいえないが、いくつかモニュメントがある。

現在の城東高校の一角に病院を開いたので、その道は「関の小路」と呼ばれた。平成3年に「こ

の地にゆかりの関寛齋の遺徳を偲び慈愛と進取のところに学ぶべし」と現在の城東高校内に「慈愛進取の碑」が建立された。

また、助任川沿いに作られた中徳島河畔緑地公園には医学書を抱えた若き「関寛齋先生」の胸像が建立されている。フランス式の軍服を着ているようだが、幕府軍軍医時代の姿を摸しているのだろう。



徳島の関寛齋胸像(筆者撮影)

寛齋に関するイベントも、WEB上でざっと調べただけの推定だが徳島は少ないと思われる。記憶に残っているのでは、徳島県立文書館で平成12年8月の開館10周年記念特別展で「北海道開拓と徳島の人々」という企画があり、その中で「理想郷を求めた関寛齋」として展示されている。

○どうすれば徳島の文化資源として伸びるか

徳島における関寛齋の文化遺産としての活用度はとても低い。現段階で発掘しなければならないのは徳島県人の関心である。その方法を考えてみる。

一つには関心を喚起するためには文学的掘り起こしが有効ではないだろうか。例えば高田郁

『あい／永遠にあり』は寛齋の妻を主人公として視点を切り替えるという面白さがある。他にも郷土の作家ならではの視点も可能なはずだ。なるべく切り口が多い方が読者にビビッドな人間像を提示できる。また、寛齋とトルストイ主義との関連での掘り起こしはこれからだという感じがする。

二つには、他の地域との連携が顕彰活動の活性化に有効であろう。寛齋の一番長く暮らしていたのが徳島で、地域の住民との結びつきが伝説になるほどの活動をしていた。すでに顕彰活動が進んでいる他の地域、陸別や東金などとの連携は大いにプラスになるはずだ。

三つには、顕彰活動の推進を担う主体となる組織を強化する必要があるのではなかろうか。それとともに資料を展示する空間が是非必要である。自治体・行政の関心を引き出すためにも、例えば徳島では医学関係からの顕彰の動きがあり得るのではないか。福島義一氏の『阿波医学史』などが参考になろう。幕末の阿波藩の洋楽教育という切り口からもまだまだ発掘を勧めるべきことは多い。この領域では徳島では長井長義の顕彰はかなり進んでいる。長井長義が徳島の「洋学校」で学んでいた頃、関寛齋は藩医であったから、二人はなんらかの接点があったと推測されるが、その資料はまだ発見されていないようだ。ただ長井が長崎に勉学に出発したときの荷に関寛齋の紹介状らしい書状が含まれていたらしい(『長井長義長崎日記』)。いろいろな人物の絡み合いのストーリー化は生き活きとした人物像を作り上げていき、それが文化資源となっていく。

四つには関寛齋と徳島の北海道開拓の歴史を有機的に結びつけていく仕事である。このアプローチはすでに述べたが文書館のイベントで行われている。さらなる深掘りが歴史的にも文学的にも可能なのではないか。

寛齋について思いつくままに並べたが、顕彰運動のきっかけとなれば幸いである。

※注)「稲むらの火」

「稲むらの火」は、1854年の安政南海地震津波に際しての出来事をもとにした昔の国定国語教科書に載った話である。内容は五兵衛という老人が地震のあとに海の水が引いていく異変を高台から見て津波を予感し、自分の刈り取った大切な稲むらに火を放ち村人に知らせたというものである。地震による津波への警戒、早期避難の重要性を教えるとともに犠牲的精神の発揮を説き、現代でも防災減災のために良く引用されるようになった。この話は、小泉八雲の英語による“A Living God”という作品を翻訳して再話して文部省の教材公募に中井常蔵という方が応募したものだそうだ。

実はこの話にはモデルがあり、紀伊国広村(現在和歌山県有田郡広川町)での出来事で、五兵衛のモデルは濱口儀兵衛(梧陵)という人である。浜口家は豪農豪商で紀州の西の濱口家(代々儀兵衛を名乗る)と千葉の銚子に住み醸造業(現在のヒゲタ醤油に連なる)を営んだ東の濱口家に分かれる。

史実では、安政元年11月5日(1854年12月24日)夜、安政南海地震の津波が広村に襲来した際に、梧陵は自身の田の藁の山に火をつけて安全な高台への避難路を示す明かりとしたことにより、速やかに村人を誘導、村人の9割以上を救った(死者30人)という。その偉業と教訓を学び受け継ぐべく、ゆかりの地和歌山県有田郡広川町に、2007年(平成19年)に濱口梧陵記念館と津波防災教育センターから成る「稲むらの火の館」が建設された。

※注)二宮尊親

二宮尊親は農政家、開拓者で祖父二宮尊徳の遺志をつぎ福島県相馬に興復社をおこした。明治29年同社は北海道に入植、十勝の牛首別(豊頃町)に興復社農場をひらいた。入植10年で興復社の開墾実績は、大いに上がり二宮地区は1,345haもの大農場となった。大正11年11月16日68歳で死去。編著に「尊徳翁分度論」など。

1-3 橋本夢道を郷土で輝かせる

○文人を輝かせること

日本の各地域の観光資料を見ていると、文学は郷土の文化資源になりやすいことに気がつく。徳島でもすでに何人かの郷土関係の文学者の顕彰に力を入れ、それなりの効果を挙げているが、まだ充分とは言えない。新たな発掘や発展の可能性がある文化資源である文人が幾人もいる。発掘とはいうが、すでにある程度の普及度がある方が文化資源としては開発しやすい。その領域では全国的によく知られているが、地元の人にはあまりなじみが無い場合などは貴重な埋もれた資源とも言える。

○夢道とはこんな人

橋本夢道は新興俳句系の代表的作家として文学史に登場する著名な俳人である。だが俳句史を紐解いたことのある人を除けば、一般的に俳句をたしなむ人の間でも、彼が徳島生まれであることは余り知られていない。ましてや、俳句に興味があれば地元徳島でも名前を知る人すら少ない。

無礼なる妻よ毎日馬鹿げたものを食わしむ

夢道の代表的な句である。句集『無禮なる妻』にはこの句に続いて〈あれを混ぜ此を混ぜ飢餓食造る妻天才〉〈妻の留守に押入をのぞき驚き飢餓日記〉と掲載されている。昭和23年頃の句で食糧難の時代、文字通り人々は飢えていた。妻の静子も代用食にいろいろ苦勞をしたのであろう、それを勞る夢道の心が感じられる。

金子兜太がNHKのBS番組「私の一冊／日本の百冊」で句集『無禮なる妻』を採りあげて、この句についての言葉が残っている。

(注:各界の著名人100人に「私の最も大切な本」を1冊あげてもらい語る番組。2008年10月26日から2009年3月28日まで続いた)。WEBに記載されていたので引用する。

・・・夢道は貧乏暮らしで、奥さんとし

ては貧しいおかずしかできないと、ちゃんとわかっているわけですよ、その妻を愛している。『おまえさんよ。無礼な女だな。毎日馬鹿げた、へんなものばかり食わしているじゃないか』とっている。『おまえが好きだ』とはいわないで、『おまえは馬鹿げたものを食わしむ』というのは最大の愛情表現といえる。これは今の若い人たちにも分かるんじゃないかな。(中略)。わたしは自分の俳句はね、神戸のときから長崎の時代、長崎で原爆を意識しながら作った。どうも頭でっかちという感じだった。夢道さんの句を見てから、よけいに感じるようになった、夢道さんの影響じゃないかと思う。……

金子兜太が夢道の句を見て、時代を人間の体で受けとめ、生き様を言葉で示し得た句として今の時代にも見てほしいと評した句である。その作者が夢道なのである。

夢道は1903年(明治36年)4月11日に徳島県名東郡北井上村(現在の板野郡藍住町)の小作農に生まれ、小塚尋常小学校を卒業している。本名橋本淳一。卒業後に藍商の奥村商店に丁稚奉公して、成績が良かったのであろう、14歳のとき抜擢されて深川の東京支店に移住した。東京に移ってから休日には市立図書館に通い書物を濫読してしだいに文学への目を育てた。

当時東京ではゴシップ報道の先駆といわれる反権力的な新聞、『萬朝報』に人気があり最大の発行部数を誇っていた。『鉄仮面』や『嗚呼無情(レミゼラブル)』の翻訳で知られる小説家黒岩涙香の発刊である。橋本夢道は、『萬朝報』の萩原井泉水の句に惹かれ、1922年より井泉水の創立した自由律俳句誌「層雲」に投句をはじめ。そこで夢道は次第に頭角を現し自由律俳句の旗手となった。俳句評論家の川名大氏は著書『現代俳句』の自由律俳句の系流の俳人を記述するとき、尾崎放哉、栗林一石路、種田山頭火、橋本夢道の四人を挙げている。

○俳句弾圧不忘の碑

橋本夢道を文学史的に、顕彰すべき業績は自由律俳句の推進者であることによる。だが、戦時中の思想弾圧を受けた俳人であることがより強烈な印象を与える。昭和10年代半ばは暗い時代である。俳句の自由主義的傾向を危険とみなした当局は治安維持法による思想弾圧を行い、多くの俳人が投獄された。橋本夢道もその中の一人である。世にいう「昭和俳句弾圧事件」「京大俳句事件」である。

この忌まわしい事件の風化を防ぐべく、近年金子兜太をはじめ多くの俳人達によって、モニュメント「俳句弾圧不忘の碑」が建立された。場所が、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の近辺の「槐多庵」ということも意義深い。碑の呼びかけ文・趣意書を引用しよう。

俳句弾圧不忘の碑

一九四〇年(昭和十五年)二月十四日から一九四三年(昭和十八年)十二月六日まで、当時の戦争・軍国主義を批判・風刺した俳句や反体制的な作品を作ったとして、少なくとも計四十四人の俳人が治安維持法違反容疑で検挙され、うち十三人が懲役刑を受けました。留置場で心身の苛酷な苦痛を強いられたり、釈放後に病死したりした者もいました。彼らの犠牲と苦難を忘れないことを誓い、再び暗黒政治を許さず、平和、人権擁護、思想・言論・表現の自由を願って之を建立します。

呼びかけ人 金子兜太、窪島誠一郎、マブソン青眼他六十六名協賢者五百五十一名

二〇一八年二月建立



上田市の俳句弾圧不忘の碑(筆者撮影)

碑には金子兜太の文字で大書した「俳句弾圧不忘の碑」という文字の他に上記趣意書の和文と英文、それに弾圧された俳人の作品十七句が記され、そこに橋本無道の句〈大戦起るこの日のために獄をたまわる〉も刻まれている。この句は1941年2月に検挙された夢道が12月8日の真珠湾攻撃を獄中で知ったときの句という。現代の日本では、若い人たちが思想弾圧とはいかなるものであったかを想像することすら困難かも知れない。だがそれが日常の中に影を落としていた時代が存在していたのである。忘れてはならない時代である。以下に不忘の碑に刻まれた十七句を引用しておく。

降る雪に胸飾られて捕へらる
秋元不死男(東京三)
憲兵の怒気らんらんと廊は夏
新木瑞夫
墓標立ち戦場つかのまに移る
石橋辰之助
我講義軍靴の音にたゝかれたり
井上白文地

戦争をやめろと叫べない叫びをあげている舞台だ
栗林一石路
兵隊が征くまつ黒い汽車に乗り
西東三鬼
出でて耕す囚人に鳥渡りけり
嶋田青峰
一兵士はしり戦場生れたり
杉村聖林子
千人針を前にゆゑ知らぬいきどほり
中村三山
戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ
仁智栄坊
血も見えず敵飛行士の亡せゐたり
波止影夫
大戦起るこの日のために獄をたまわる
橋本夢道
徐々に徐々に月下の俘虜として進む
平畑静塔
ナチの書のみ堆し独逸語かなしむ
古家樞夫
英霊をかざりぺたんと座る寡婦
細谷源二
血も草も夕日に沈み兵黙す
三谷昭
戦争が廊下の奥に立つてゐた
渡辺白泉

○あんみつ伝説

みつまめをギリシャの神は知らざりき
もう一つの有名な夢道のエピソードを挙げておこう。あの「あんみつ」の発案者だといわれていることだ。1931年、夢道は「プロレタリア俳句」に関連していることと、及び会社に無断で結婚をしていたことを理由に奥村商店を解雇される。そのあと輸入雑貨商に勤めるが、その会社も1937年には経営危機に陥った。その時夢道の提案で「しるこや」を始めることになった。それが、銀座のあんみつ屋「月ヶ瀬」である。開店にあたり、夢道は目玉商品として「あんみつ」を発案して、大ヒットさせたという。上記の句は

実は夢道が作ったキャッチコピーである。このキャッチコピーは五七五でリズムカルなうえ、翌年市電(後の都電)の中吊り広告等で派手に宣伝された。おかげで月ヶ瀬の前には開店前から行列ができるようになったという。1939年には銀座5丁目に二号店を、さらに都内のあちこちに支店を出しいずれも大盛況。原価五銭のみつまめが十銭で一日二万杯も売れた。しるこやあんみつを含めて一日の売り上げが三千円を超えたという。現在の貨幣価値では1000万円ほどである。ハイカラな銀座の「月ヶ瀬」でみつまめを食べるのが少女達の流行になっていたことが、「ギリシャの神は知らざりき」という言葉とともに、今でもエッセイなどに登場する。五七五のキャッチコピーおそるべし、である。

○戦後の活動

既述したように1941年2月開戦を前に夢道は検挙される。月島署の後、巣鴨の東京拘置所の独房に移送された夢道は2年間の拘留のあと、1943年に保釈され12月に東京地裁で懲役2年執行猶予3年の判決を受けた。

1945年3月の東京大空襲の直後に先に疎開させていた妻子の後を追って夢道は徳島へと疎開しそこで8月に終戦を迎える。彼は12月には東京へ戻り、新俳句人連盟を中心とした俳句活動を開始する。

戦後の時代の句では以下のような句が知られている。

妻よおまえはなぜこんなに可愛いんだらうね
(1950年)

石も元旦である(1963年)

大茜のこす最後の鴉かな(1973年)

向日葵を見にゆく炎天酒一升(1973年)

ユーモアある人間愛にあふれた自由律の俳句である。彼の句はリアルな人間くささが魅力といえよう。

1974年10月9日病状悪化、家族に看取られながら国立がんセンターで死去した。71歳であっ

た。墓石に刻まれたのは1942年独房中での作であり彼自身が選んだ句である。

うごけば寒い

○顕彰の動き

橋本夢道の人物や作品に関しては、かなりよく研究され、論考は数多い。東京月島には「橋本夢道資料室」があり、そこを拠点に「月島橋本夢道の会」などが精力的に顕彰活動を行っている。夢道の人生活動の中心が東京であったから、やむを得ないかも知れぬが、やはり故郷徳島での顕彰活動はまだこれからという感じである。その中で徳島郷土史家漆原伯夫氏の『桃咲く藁家から・橋本夢道伝』は伝記として気を吐いている。

繰り返すが、橋本夢道の文学史的意義は深く、俳句史の中には自由律俳人の代表格として登場する。また朝日新聞記者であった殿岡駿星氏は夢道の近くに接していたので東京の顕彰活動の中心人物の一人である。『橋本夢道物語』は年譜や参考書がまとめられているし、同じ著者による『橋本夢道の獄中句・戦中日記』も興味深く読め、力作である。全体として夢道は文化資源としての開発はかなり準備が進んでいると言える。

文学を文化資源と考えると、作品の他に業績を顕彰するモニュメントが威力を発揮する。特に徳島市は大空襲で焦土と化したので、実際の夢道の生活の跡を特定して記念の場所とするのは困難という不利な条件がある。

前述した『俳句弾圧不忘の碑』は夢道の生涯で最も重要な出来事の一つを顕彰したものであり、社会的にも非常に重要な意義を有することは当然であるが、やはり、徳島県に所縁の文化人としての顕彰という観点からのモニュメントが欲しい。

現在夢道の句碑は二基だろうか。それがいづれも徳島にあることを徳島人は自慢していると思う。一基目は1952年の作品〈母の渦子の渦鳴門故郷の渦〉で大鳴門橋のたもとにある鳴門公

園の高台に1981年に建立されている。また二基目〈花茨釣れてくる鮎のまなこの美しき〉の句碑が1995年故郷である板野郡藍住町の正法寺川公園の一角に建立された。没後21年のことである。この句碑に関しては『夢道母郷集』というタイトルで句碑完成記念誌がでている。多くの俳人や関係者の夢道に対する思いが寄せられており建設に至る過程など読み応えがある。



藍住町の橋本夢道の句碑(筆者撮影)

イベントは県外でも東京の「夢道サロン」などが中心になって精力的に実施されている。徳島県内では「夢道忌記念俳句大会」が藍住町の例年行事として行われている。藍住町総合文化ホールで開かれ、2021年には第18回を数えた。参加者は藍住町を中心に徳島の俳人が中心である。この俳句大会はもっと規模を拡大させ全国的なイベントに成長するポテンシャルがある。

また徳島県立文学書道館で『生誕百年記念／橋本夢道展』が2003年に開かれた。文学書道館には巣鴨の東京拘置所に送られてからの俳句を獄中で記録した「紙石板」(KAMISEISEKIBAN)が保管されている。それは妻静子が面会で布団を差し入れたときその中に石筆といっしょに隠し入れたものである。有名な〈大戦起るこの日のために獄をたまわる〉はそこに書かれた。文学書道館には「紙石板」の他多くの夢道の色紙・短冊・掛け軸が保管されている。ただ夢道個人の顕彰のための資料館でないことによる限界はある。

○文化資源としての未来へ

橋本夢道は今回対象にした2人以外を考へても徳島の発掘すべき文化人資源としては全国的には著名度が高いかもしれない。しかし県内においての発掘はまだ規模が充分とは言えない。

いくつかの提案ができるように思われる。

一つには、すでに俳句史的位置づけは固まっているにもかかわらず、それが徳島と結びついていないため、まずは全国の俳句の愛好者達へ「徳島が生んだ俳人橋本夢道」の認識を深めてもらうことである。また全国の夢道ファンとの連携を深めることが最重要な戦略ではなかろうか。昨今多くの自治体が自分の地域所縁の俳人を顕彰するための俳句会を全国に呼びかけて行っている。自治体と住民の協力があれば、今行われている「夢道忌俳句会」を全国規模に発展させることは可能である。

二つには他の文化資源以外の観光資源等々のハイブリッド化あるいはネットワーク化を図ることも有効であろう。たとえば、関連地域の阿波踊り連などは、もっと夢道の句〈十万の下駄の歯音や阿波おどり〉を宣伝しても良い。遍路道沿い、あるいは今はやりのスイーツの店とタイアップして、例えば「無礼なる妻のあんみつ」とか「なぜにかわいいプチケーキ」や「馬鹿げたババロア」などという名称の新スイーツ製品を売り出したらどうであろうか。

三つには俳句の業績を深める研究と夢道の生涯のストーリー化を図り、今以上に精力的に推し進めることであろう。これも大学や既存のあるいは新しく研究者とファンの組織を結びつけていけば可能であろう。

四つには顕彰の拠点を作ることである。現在徳島県立文学書道館が夢道関係の資料を多く持っているが、それを発展させるのもよいが、できるなら夢道記念館のような独立した資料館ができることが好ましい。

第2章 多様性の時代の文化資源の発掘

2-1 多様性の時代の文化資源の発掘

「なにせ四十六も都道府県があるのだから徳島を知らない人がいてもええでないで」、それはそのとおりかもしれぬ。

だが観光を生業にする人にとってはそういつてはおられない。徳島の知名度が少しでも上がり、魅力を感じ、訪れる人が多くならなければ困るわけである。そのためには他の地域と差別化し、観光客の心をくすぐる何かを提示しなければならない。徳島にはそういう何かがあるのだろうか。

「ある」と断言できる。

徳島ならではの魅力あるモノコトはいくらでもある。

でも、存在していても、全国的に知名度が高くないモノコトが多いことも事実だろう。だが知名度がないということと魅力は別物である。魅力がないと思われるのは「文化の発掘・精錬・加工・研磨」が充分になされていないからだと考えている。

少し角度を変えてみる。差別化と述べたが、経済用語としての差別化とは「自社製品の認知上の価値を増加させ、競争優位の獲得を目指していく取り組み」を指している。現代は地域の時代といわれる。また、多様性の時代といわれる。地域の時代には観光でも一定数の観光客と云うパイの奪い合いは限界があることを認識することが重要だろう。戦略的な重点は、パイの奪い合いのための差別化より、多様性という観点から徳島ならではの「文化の発掘・精錬・加工・研磨」に力点をおき、関連する他の地域と連携して効果をあげ、パイそのものの増大を目指すべきではないだろうか。

さらに重要なことは、文化資源がその地域にとって必要な理由は、他の地域から人が来てお金を落としてくれることよりも、その地域が住んで楽しく誇りを持てるものになることではな

いだろうか。よくいう住むことの満足度が向上することではないだろうか。また、住んでいる人が誇りを持ち愛着を持っていなければ、その土地を訪れたいはずはない。訪ねてみて、魅力ある土地はどこでも、その土地の人が住むことを誇りに思っている土地であった。

高度成長期を経たころ、「価値観の多様化」ということがいわれ、大工場生産様式でも少量多品種の生産物に対応するべき生産方式が開発され、また手作りの良さなどということに価値を見いだすようにもなった。現代では「価値観の多様化」という考え方は、生活様式から宗教的、文化的風土の領域にいたるまで広がった。マイノリティへの配慮を意識し始めたのもその流れの中である。このことは人間の倫理観が発達したこともあるが、情報手段が発達して異なる歴史風土や階層にある多種多様な人間が、直接に接する機会が増えたことによる必然的流れとも考えられる。

私達がよく聞く「地域の時代」という言葉も、そのような人類社会の歴史の中で起こっている必然的考え方ともいえる。つまり地域の時代は価値の多様化の中で考えるべきことなのだ。私達の徳島県は他の都道府県に比べて、どんな優れたところがあるか、と競争するのではなく、どんな特徴があるのかを認識し、それに愛着を感じるまで識る、ということが大事なのではないだろうか。

2-2 試論的テーゼ

①地域の多くの人や組織が参加して進めること

地域文化資源の発掘と発達の原動力はその地域の人の郷土愛である。徳島経済研究所では先般『徳島が好きになる本』を出版したが、文化と経済でみる「徳島」という副題にもあるように、徳島の現状を知ることで徳島が好きになるという発想で成された本である。知る最善の方法は自らがそれを発見することである。多くの人に参加し自ら発掘することでその土地がより好き

になる、という好循環が得られる。

すでに徳島の各地域でも「街おこしマップ」を制作する作業が各地で進められている。これらの動きはまず組織と場所の拠点を作り、お互いにネットワーク化することでより質の高い動きになるのではないだろうか。それには行政や各専門の文化団体、学術団体の協力が必要であろう。

地域案内書の類の書物は各種あるが、昔出版された『東京風土図』は各地域の路地のすみずみまでとってよいほど良く取材されている。その手本になったのは明治の矢田挿雲の『江戸から東京へ』と聞いているが、ともに参考になる。

ご当地検定、あわ学、阿波学会等々の活動も多くの人をそのネットワークに組み入れることになる。

②多くのモノコトをネットワーク化すること

発掘資源の複合化が大事である。よく観光は点でなく平面化が必要だというのが、それである。特に範疇の違う資源の複合化がアイデアを生

む。多くはすでに試みられていることであるが、「見える資源化」（モニュメント、資料館等々）、「参加できる資源」、「食べたり買ったりする資源化」、「案内情報のネットワーク化」が重要である。

③多くの地域と連携すること

これもネットワーク化の範疇であるが、特に徳島以外の地域との連携が重要である。関寛斎や橋本夢道には連携をするべき地域に関して多くの可能性が秘められている。

④人間像を立体的に構築し魅力を

多くのメジャーな文化資源には、歴史的深みがある。その歴史的深みは多くはその地域の歴史のストーリー化が積層してできあがる。TV大河ドラマが先にあるのではなく、その積層化の結果がドラマ化されるのである。ともあれ文化資源の発掘・発展を多くの人々が楽しい仕事として不断に取り組めるようになれば、地域は住んで幸せなところに一歩でも近づくのではないだろうか。

<主な参考文献>

<全般>

- ・徳島経済研究所『徳島が好きになる本』、2021年、非売品
- ・矢田挿雲『江戸から東京へ』、昭和50年5月、中央公論
- ・産経新聞社会部編『東京風土図』、昭和36年7月、現代教養文庫

(関寛斎関連)

- ・徳富蘆花「みみずのたはこと」
- ・関寛斎「関牧場創業記事」、青空文庫、1912年に徳富蘆花のすすめで出版した「命の洗濯」（警醒社書店）を定本にしている。
- ・川崎巳三郎『関寛斎』、1980年9月、新日本新書
- ・伊藤和明「津波防災を考える「稲むらの火」が語るもの」、2005年7月、岩波ブックレット656
- ・ラフカディオ・ハーン「A Living God」、1896年、「稲むらの火の館」パンフレット
- ・西池冬扇「時空の座拾遺」、2018年4月、ウエップ
- ・司馬遼太郎『胡蝶の夢』新潮社、新潮文庫ほか
- ・司馬遼太郎『街道をゆく15 北海道の諸道』朝日文庫ほか
- ・城山三郎『人生余熱あり』光文社文庫
- ・高田郁『あい／永遠にあり』、2013年、角川春樹事務所
- ・徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義長崎日記』、2002年、非売品

(橋本夢道関連)

- ・橋本夢道句集『無禮なる妻』(新装版)、1954年8月、未来社
- ・殿岡駿星『橋本夢道物語』、2010年11月、勝どき書房
- ・殿岡駿星編著『橋本夢道の獄中句・戦中日記』、2017年8月、勝どき書房
- ・川名大『現代俳句』、2001年5月、筑摩書房
- ・田島和生『新興俳人の群像・「京大俳句」の光と影』、思文閣出版、2005年
- ・山田春生『戦中戦後俳壇史・俳句の旗手』、2007年10月、駒草書房
- ・樽見博『戦争俳句と俳人達』2014年2月、(株)トランスビュー
- ・橋本夢道句碑建立期成同盟会『夢道母郷集』、1995年12月
- ・漆原伯夫『桃咲く藁家から・橋本夢道伝』2003年、漆原都夫

<西池氏裕氏略歴>

1944年生

1974年4月 川崎製鉄入社技術研究所

2000年～2004年 東京大学先端科学技術センター客員研究員

2006年4月 財団法人徳島経済研究所技術顧問(現)

2007年8月 徳島県経済成長戦略アドバイザー(兼)

2008年～ ひまわり俳句会主宰

2011年9月 徳島県教育委員長(～2012年8月)